勇将

後藤又兵衛

黒部亨

PHP研究所

後藤又兵衛

勇将

黒部亨

江苏工业学院图书馆
藏书章

PHP研究所

〈著者略歴〉

黒部　亨（くろべ・とおる）

昭和四年、鳥取県生まれ。鳥取師範学校卒。「群像」新人文学賞、「小説サンデー毎日」新人賞を受賞。主な著書に『松永弾正久秀』（PHP研究所）、『遠い海鳴りの日』『白鷺の城』『播磨妖刀伝』『幻にて候』（以上、講談社）、『流香譚』（日本経済新聞社）など。日本文芸家協会会員。

勇将・後藤又兵衛

一九九七年三月二十七日　第一版第一刷発行

著　者　黒部　亨

発行者　江口克彦

発行所　PHP研究所

東京本部　〒一〇二　東京都千代田区三番町三番地一〇
第四出版部
☎（〇三）三二三九―六二五七
普及一部
☎（〇三）三二三九―六二三三

京都本部　〒六〇一　京都市南区西九条北ノ内町一一
☎（〇七五）六八一―四四三一

印刷所
製本所　図書印刷株式会社

乱丁・落丁本は、送料弊所負担にてお取替えいたします。

© Tooru Kurobe 1997, Printed in Japan

ISBN4-569-55560-8

目

次

初出仕（はつしゅつし） 7
龍と獅子 33
九州島津攻め 75
だまし討ち 110
義軍にあらず 142
嘆きの谷 174

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

謀略　関ケ原　198
深夜の客　242
訣別　277
浪々記　300
残照　328

装幀　多田和博

勇将・後藤又兵衛

初出仕

(一)

納屋の横の柿の木に鞍置馬が一頭つながれている。伯父の藤岡九兵衛の栗毛だ。もう老馬なのに馬まであるじに似た元気者で、まだ駆けたりないとみえて、しきりに前肢で土をかいては鼻を鳴らしている。

ひさしぶりに余田村からやってきた伯父の用件に又兵衛は心あたりがなかった。用があればいつでも屋敷に呼びつける伯父が、今日にかぎって自分のほうから出向いてきたところをみると、まずたのしい話ではない。

又兵衛は足音をしのばせて庭へはいった。どうにも気が進まない。うしろの神西不楽を振り向いたら、しかたがないではないか、と目くばせして奥座敷へ顎をしゃくった。

母屋の奥座敷から伯父の錆びた声がきこえてくる。相手をしているのは妻のさよだが、おや、と聞き耳を立てたほど今日の伯父の声は明るかった。障子がしまっていて部屋の中のようすはわからないが、客の相手をしているさよの声まではずんでいる。

（……いったい、どうした風の吹きまわしだ）
近くの神社まで呼びにきてくれた不楽がうしろから又兵衛の耳に口を寄せて、
「あの調子ではよい話かもしれぬ。あまりお待たせしては機嫌をそこねる。はやく行け」
背中をおした。
「うっかり顔を出すと雷が落ちるでの」
「だからはやく行けというておるのだ」
「なんの用でわざわざおいでたか、おぬし、見当はつかぬか」
「おぬしに心当りがないのに、わしにわかるわけがなかろう。又兵衛にじかに話すことがあるゆえ寄んでまいれと、わしが聞いたのはそれだけだ。大事な用件がありそうなお顔であったわ」
いまはこの南山田村から北一里の余田村に住む藤岡九兵衛は、又兵衛にとっては亡母の実兄にあたる。又兵衛が四歳で母を、八歳で父をうしなって天涯の孤児になったとき、身柄を引き取って養育してくれた大恩ある伯父である。ただ、むかしから頑固で短気、口小言の多い偏屈者ときている。申しわけないことながら顔を合わせるのが億劫な相手だった。
「お叱りをうけるおぼえがなければ、なにもびびることはあるまいが」
不楽にせかされて、又兵衛はしぶしぶ縁先に行って二つ三つ咳払いをした。
さよがすぐ内から顔を出して、
「おもどりなされませ。伯父上さまがさきほどからお待ちかねでございます」
縁から座敷へあがって挨拶した。近くに住みながら二人が顔を合わせるのは半年ぶりになる。さよが入れかわりに座敷を出ていこうとしたら九兵衛がその背中にむかって、
「さよ。妊婦を使うてわるいが、今日はめでたい話できたゆえ、酒のもてなしにあずかってもよいの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

う」
あいかわらず遠慮がない。臨月ちかいさよが腹に片手をあてて、
「はい、心得ておりまする」
どうやらさよはすでに伯父の用件を聞かされているとみえる。
「めでたい話、と申されましたか、伯父上」
「ムダ話をしにくるほどわしはひまではないわ。こうみえてもいろいろ多用なのじゃ」
「……ごもっともで」
「よいしらせをもってきたというのに、もう四半刻も待たされたわ」
「申しわけありませぬ」
九兵衛は縁先で顔だけのぞかせている不楽を見て、おまえもこちらへあがれ、と顎をしゃくったが、不楽は遠慮して縁にかしこまった。
「じつはきのう御着に呼ばれての。あちらに一泊してのもどりだ」
又兵衛はうしろの不楽と目を見交わした。
御着――といえばこの村から二里半ほど南の御着城のことで、城主の小寺政職が逃亡して空城になったのを、いまはもと小寺家の家老だった黒田官兵衛が管理している。したがって御着城に呼ばれたということは官兵衛に呼ばれたということになる。
伯父の来意がただごとでないと直感して又兵衛の表情がゆっくりと引き締まった。緊張すると両眼が大きくなって、二十一歳の若者とはおもえない底光りを放ってくる。
天正八年（一五八〇）の初夏を迎えたいま、播磨国内の誰もが息をひそめて注目している人物が二人いる。一人は播磨を平定していま姫路に新城を築きつつある羽柴筑前守秀吉。もう一人はこの

三年間秀吉の軍師格として播磨平定に功をあげた地元の黒田官兵衛孝高である。播磨の中世はこの二人によって終止符がうたれて、いま新しい国づくりがはじまろうとしている。

その官兵衛から九兵衛のもとへ「ひさしぶりに碁を打ちにまいられよ」と誘いがかかったのが一昨日のこと。さっそくきのう御着城へ出かけていったら碁を囲みながら官兵衛が不意に、

「又兵衛はいまいかがしておるかの」

といいだした。

「退屈しのぎに、子づくりに精を出しておりまするわい」

「子づくりとな。なるほど、戦がすめばさしあたり侍のすることはそれくらいであろうな」

「なにを発心したのか、昼間は農事のかたわら、近郷の寺社巡りもいたしております。侍をやめて坊主にでもなるつもりかもしれませぬ」

九兵衛の家は代々神東郡一帯に根を張る土豪で、官兵衛の父職隆とは昵懇の仲だったから、九兵衛も官兵衛が万吉といっていた子どものころからよく知っている。だから官兵衛も九兵衛には一目おいていた。

「わしが呼べば又兵衛はここへくるかのう」

盤面に目を落としたまま、さあらぬ態でいった。

「……これはまた、おもいもかけぬお話で」

「吉兵衛の躾け役にどうかとおもうての。吉兵衛には兄というものがない。人質ぐらしをさせたせいか、ちとつむじを曲げて帰ってきおった。早めに撓めなおしておかぬと面倒なことになるとおもうてな。……おことはどうかんがえてじゃ」

又兵衛を黒田家に仕官させようとの重大用件とわかって、九兵衛は指につまんでいた碁石を碁笥に

もどして座り直した。もう碁どころではない。額ごしに官兵衛の顔をのぞきこんだ。本気になると片方の眉がつりあがるのと同時に頬の刀傷が引きつれて、女子供は目をそらすほどこわい顔になる。

当の又兵衛よりもさきに九兵衛の意向を打診してきたところがいかにも官兵衛らしい配慮だった。ついこのまえまで敵として戦った又兵衛を召抱えるといえば、承諾するにせよ拒否するにせよ、又兵衛の自尊心を傷つけるのではないかと懸念しているのだ。誇り高い又兵衛の気性を念頭においているところはいかにも官兵衛らしい、と九兵衛は感心した。

「まこと、吉兵衛さまのおそばに又兵衛を差し出せと、さよう申されますので？」

「たんなる遊び相手なら、家臣の子弟がいくらでもいる。だが、多少とも軍法を指南できる人物となると、残念ながらわが家中には一人もおらぬ。あきれるほどおらぬわ。おことの目で見てもそうであろうが」

「なるほど。そういうことでござったか」

ようやく官兵衛の真意が腑に落ちた。おもいがけない成り行きに九兵衛の顔が紅潮してきた。

いまでこそ黒田家は播磨の出世頭になっているけれども、官兵衛の祖父重隆が備前福岡から姫路へ流れてきたころは見るも哀れな素牢人だった。姫路近郊で浮浪者同然の暮らしをしていたのを地元の者はよく知っている。

御着城主の小寺家に拾われてから運がむいてきた。重隆の晩年にひとかどの身分に立身したが、もともと流れ者とあって譜代の家来という者が一人もいない。現在の重臣たちも職隆・官兵衛父子が二代にわたって近郷の百姓の倅たちのうちからかき集めて飼い育ててきた連中ばかりで、もとは伯楽、浮浪者、家出者といった手合いが多い。一騎駆けの槍働きを得手とする者はいても読み書きができない。言葉づかいや礼儀作法を心得ている者はほとんどいなかった。

いま黒田家の交際範囲は中央の大名・豪族などの上流階級にひろがっている。こうなるとなにかと不便が多かった。たとえば家臣を他家へ使者に出してもろくに交渉ごとができない。文字が読めなくて恥をかいて帰ってくる。年貢の収納事務や金銀の勘定をさせてもヘマばかりやっている。役に立つ人材がすこぶるとぼしかった。

要するに黒田家は教養と武略を兼ねそなえた人材の補給が急務となっていた。

その点、後藤家は黒田家臣団の誰よりもまず家格においてぬきんでていた。先祖をたどれば遠く藤原秀郷にはじまり、源悪源太義平の十六騎の一人、後藤兵衛実基の子新兵衛基清を祖としている。基清のとき播磨の守護となり、のち赤松家の幕下に属して年寄衆となった。嘉吉の乱によって一時没落したが応仁の乱によって再興し、春日山城と南山田城の城主に返り咲いていらい子孫を繁栄させてきた。いまでは播磨を中心にその周辺に一族が多数分布している。

「又兵衛は若年ながら、敵の立場で戦ってみて、わしも学ぶところが多かった。こういう男を殺しては播磨の損だとおもうたゆえ和議を申しいれたのだ。いつまでも鍬をもたせておいてはもったいない。どうであろう、兄のような立場で吉兵衛を導いてはくれまいか」

「あいわかり申した。又兵衛がなんと申すかわかりませぬが、お話のおもむき、しかとつたえてやりましょう」

その夜はおそくまで碁を打って城に一泊し、今日余田村へ帰る途中に立ち寄ったのである。

「又兵衛よ、黒田官兵衛というご仁はうわさにたがわず思慮ぶかい男だぞ。この一年、そなたやわしのことなど忘れたふりをしていて、じつはそなたの気持ちがなごむのを待っておったのだ。まいったわ、これは、ハ……」

縁先で聞いていた不楽が、このとき座敷のなかへにじり寄ってきて又兵衛の横にすわった。仕官の

話ならわしもいるぞ、といいたげに長い顔を突きだした。
「吉兵衛の指南役、というのは、つまり、表むきの口実だ。ありようはそなたの武勇才覚に惚れて召抱えようとのこんたんだ。天邪鬼なそなたのことゆえ、召抱えるといえば、かつての敵に召抱えられるものかと駄々をこねはせぬかとおもうたのであろう。又兵衛よ、いよいよ時節到来とわしはみたが、どうじゃ」
「吉兵衛長政どののお相手となると、つまり、子守りのようなものでございますな」
「これ、見当ちがいをいたすな。吉兵衛は十三歳だぞ。もう子守りのいる年ではない。兄のような立場の指南役――官兵衛どのははっきりそう申された。つまり師匠じゃ。黒田家嫡男の師匠なら不足はあるまいが。そなたとていつまでもにわか百姓をしているつもりはあるまい」
横から不楽が、
「その話、羽柴筑前さまはごぞんじでありますかいのう」
と口をはさんだ。
「筑前さまにはなんのかかわりもない。黒田家と又兵衛とのあいだのことじゃ」
「又兵衛の奉公先なら、いっそのこと羽柴さまのほうが、さきざきなにかと好都合ではありますまいか」
「これ、不楽。そばからつまらぬ横槍をいれるな。そなたはだまっておれ」
三年前の天正五年秋、織田信長の命をうけた羽柴秀吉の軍勢がはじめて播磨に侵入してきた。このとき、播磨十六郡中、東八郡を支配する三木城の別所長治をはじめ、国内に割拠する国衆のほとんどが信長に属した。もともと播磨国衆は古くから中国の毛利に誼を通じていて、新興勢力の信長には

なじみがなかったというより、むしろ警戒心のほうが強かった。それを「次代の覇者は信長」とみてとったのが小寺家の家老で姫路城主でもあった黒田官兵衛だった。

かれは秀吉と義兄弟の約を結び、単身国内の諸豪族を説得してまわった。得意の弁口を駆使してほとんどの城主を織田方に帰服させた。そればかりかみずから使者を買って出て岐阜の信長のもとへ行き、主人政職にかわって十歳のわが子 松寿丸を人質に差し出した。信長はこれを秀吉にあずけて長浜城においた。

官兵衛の献身的な説得にもかかわらず、佐用郡上月城の赤松政範が抵抗したが、秀吉軍の攻撃の前にあえなく滅亡した。このとき秀吉は上月城の老若男女二百余人を国境の谷へ引き出して子供を串刺しにし、女を磔にした。この残虐行為に播磨の民衆は戦慄した。「織田信長の正体はこれだったのか」と激怒した。

翌年の春、秀吉は中国の毛利攻めのためふたたび播磨に侵入した。地元の怒りがこのとき爆発した。別所長治をはじめ諸城主がいっせいに反旗をひるがえした。後藤一族も基信が本城の春日山城に、弱冠十八歳の又兵衛基次は三百の兵を率いて南山田城にたて籠った。このとき不楽も行動をともにした。

不楽の家は赤松家の末裔で祖父の代に帰農した。又兵衛とはおなじ寺の和尚について読み書きを習い、山遊び川遊びをともにした竹馬の友だった。年は不楽が一つ上だが、どちらも親に縁が薄かったせいかなにかとウマが合った。

「おぬしが死ねばわしの話し相手がのうなる。いっしょに死んでやる」

不楽はそういって家伝の錆び槍を一本かついでやってきた。

春日山城のほうは徹底抗戦のすえ五月十一日に落城して基信は自刃。又兵衛の南山田城は官兵衛の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com